

開発経験は共有可能か
—日中韓にみる「セマウル運動」を事例に—

Is development experience possible to share?
The “Saemaul Movement” from CJK Perspectives as an Example

(「ODA の歴史と未来」研究部会・ラウンドテーブル)

- (1) 企画責任者(Organizer): 汪 牧耘 (東京大学)
- (2) 司会(Chair/Moderator): 大山 貴稔 (九州工業大学)
- (3) 発表者(Presenter): 汪 牧耘 (東京大学)、
チョン ヒョミン (京都大学)
近江 加奈子 (国際基督教大学)
- (4) 討論者(Discussant): キム ソヤン (韓国西江大学)
志賀 裕朗 (横浜国立大学)

キーワード: 東アジア、国内開発、対外援助、経験共有

20 世紀以降、日本・中国・韓国は、欧米社会よりも短期間で近代化と高度経済成長を達成する華やかな「奇跡」を見せた。国際開発援助のドナーとして、3 カ国は他国に自らの開発経験の共有を試みている。そうした中、日中韓の経験の異同や価値を論じる研究は多くある。しかし、そもそも日中韓が、どのように互いの開発経験を捉えてきたかについてはほとんど触れられてこなかった。

本 RT は、韓国の「セマウル運動」を事例に、それをめぐる日中韓の研究者の捉え方の比較分析を行う。セマウル運動は、1970 年代に韓国政府の主導で始まり、当初は「農村を近代化し、良い暮らしを目指す」ことを目標として掲げられた農村開発政策である。韓国はドナーとして「セマウル運動」の経験をモデル化し、途上国への移転を試みてきた。

発表者は、日中韓の 3 カ国語で書かれた文献を中心に分析を行った。その結果、セマウル運動のどの側面に焦点を当てるかは、各国の経済的・政治的・社会的環境によって異なることが明らかになった。韓国の場合、1970 年代のセマウルは権威主義体制の下で行われたもので、研究における見方もその背後の政治性を欠かせないものが多い。中国人研究者の場合では、1970 年代の韓国農村を直接に体験したことがなく、主に二次資料をもとに論じている。韓国の経験の示唆的意味を求め、セマウル運動の良い側面、なかでも政府主導による民衆の自発性の喚起を強調する傾向がある。そこでは、セマウル運動の「共産主義浸透の防止策」としての政治的な側面が捨象されている。また、国家間の違いだけでなく、一国の中でも、異なる分野間の議論には隔たりがあった。日本でも、早期の民俗学・農村社会学の研究や記述が、国際政治・開発援助研究の文脈の中で議論として触れられてこなかったことは、その例である。

開発援助に関心をもつ私たちはその歴史から何を学ぶべきか、その学びは未来の実践にどのように生かす可能性があるのか。国際開発研究は、こうした開発・援助をめぐる歴史経験を知識へと変換する営みだと言っても良い。国際開発学会・「ODA の歴史と未来」研究部会の活動の一環として、本 RT ではセマウル運動を事例に、開発経験に対する理解・解釈の「ずれ」が生じる必然性を示したい。これからの国際開発研究は、「学ぶべき」知識の抽出だけではなく、「学び方」の共有も視野に入れるべきだと提案し、議論を喚起することを期待している。